



「アメリカ村資料館」敷地内に立つ石碑。
(読売新聞大阪本社提供)

と表示された古いビルの一室に移されていた。その一室の仮事務所を不意に訪れたら、若い開教使が執務の最中だった。

わけを話すと、開教使は雑然と積まれた荷物の中から、古びた一冊の記録簿を取り出してきて、見せてくれた。過去帳だった。まるで百科辞典並みの厚さのあるその過去帳は、四すみがすり切れたようになり、紙質も茶色く変色し切っていたが、書き込まれた文字はどれもはっきり判読できた。

過去帳には、大正時代から昭和にかけて、仏教会で葬儀を行った故人の氏名、戒名、本籍、住所、葬儀年月日、埋葬方法などのほかに葬儀をつとめた開教使の署名がとどめられていた。一ページに二人分の記録が、黒インクでしるされ、年月には、日本の年号が使われていた。ページをめくってゆくうち、昭和初期

になって、盛んに父の名前が出てきた。例えば、こんなふうであった。

「第五九三号。法名 釈願行。姓名 村上畏津次。享年 六十才。原籍 熊本 県飽託郡河内村字河内。住所 1727 2nd Ave. West Vancouver. 死亡場所及び日時 昭和五年一月十二日午前十時、市立病院ニテ死亡。葬儀ノ場所及び日時 昭和五年一月十三日午後二時半 本堂。喪主村上 勝治。火埋葬 火葬。導師 多田寛哉」

私は慄然とせざるを得なかった。正直言って、父の肉筆をじかに見たのは、これが最初であった。当時、父がどんな字を書いていたのかは、とくに強い関心もなく、まして想像もつかなかった。開教使にとつて、過去帳の記入は、欠かせぬ事務処理の一つであったはずで、その字体は、ごく日常的なものに違いなかった。父の字体は、決して達筆とは言えないが、いまの私よりかっちりしており、男らしくあった。それにどこか気迫がこもっており、仕事に打ち込んだ内面がひしひしと伝わってくるようにも思えた。また、過去帳の一ページ、一ページは、日系移民の歴史がそのまま書き残っているようでもあった。

昭和初期といえば、日系移民の生活は混乱状態から戦前の一応の安定、繁栄の時期に向かつており、バンクーバー周辺には、当時、約二万人の日本人がひしめいて、日本人社会のピークを形成していた。父はそんな時代に仏教会で説教をし、葬儀や結婚式を行ない、また地方に出向いては布教につとめていたに違いない。

仏教会に残された記録類から、父の足跡がしのばれるいっぽうで、今日の日系社会の先達となった人たちの労苦におのずかと思いがよぶのだった。

一九七七年は、日系カナダ人にとつて記念すべき年となった。長崎県出身者がカナダに渡ってから、ちょうど百年目にあたり、カナダ各地で記念行事が繰り広げられたことは、まだ記憶に新しい。私はこの年、カナダで生まれ、日本で生きる人たちの間で、忘れられない体験をした。それは、彼らやその家族がカナダに寄せる熱い思いであった。

この年、私の勤務する新聞社が主催団体の一つとなって、「日系カナダ移民百年写真展」をカナダと同時に開催することになり、いきさつ上、私も担当者の一人名となった。

この間、さまざまな人たちがやってきて、写真についての質問をし、カナダでの人探しを頼み、果ては観光案内、移民やカナダ人との結婚相談まで持ち出され、私をさんざん悩ませた。だが「私はカナダへ移民して、日本に帰ってきた」、「私はカナダ生まれだ」、「私の親せきは、カナダ移民だ」、とカナダと人的につながる人を持つ人が意外と多いのは驚いた。このことは、カナダと日系を含むカナダ人に関心を寄せる人たちがいかに多いかを実証するものだといつくづく感じた。

私は、日本に住むカナダ移民の経験者とその家族、知人らが持つカナダへの感情とは、一体、何なのだろうと自問してみる。おそらく、その共通点は、一人一

人が、自分たちのカナダを内面にかかえ、時代とともに育んでいることではないだろうか。カナダに対して抱く感情は、いまとなつてはなつかしいという単なる思い以上に、カナダとの断ち切れない接点を確保し続け、その接点部分が心の中心にどっしりとした重みをもって根を張っているように思う。

日本とカナダが外交関係を正式樹立して、今年五十年という。いまや、両国を結ぶ絆は外交、経済、文化などの各面で強まりこそすれ、決して弱まることのない段階に達している。その不動の外交関係を築いた基礎の部分で、日本人とカナダ人の熱情が大きく作用していることは疑う余地がない。そして、この中に、苦闘に耐え、国づくりに参加した日本移民とその子孫、いわゆる日系カナダ人とカナダ移民経験者の熱い血を見のがすわけにはいかないだろう。

彼らのほとんどは全く無名である。だが、彼らが心の奥底で、カナダにおいて日本を思いカナダを思う気持は、人一倍強かつたに違いない。いまになって、私はそんなふうを感じるようになってきた。

ニューテンパーやバンクーバーで、私が父の実像の一部をつかんだのは、全く個人的な体験ながら、私にとつては「新発見」であり、相当の価値をもたらした。と同時に、カナダへの接点が多たひとつ大きくふくらみ「カエテの国」に対する親近感をよりいっそう深める結果となつたのである。